

つとむさん



1・アルバイトのつとむさん

川田勉は、化学会社を定年退職して二ヶ月、どうにも時間をもてあましていた。

たまたま妻に付き合っただけで近所の産直野菜の店『はっばや』に行ったとき、経理スタッフ募集の張り紙を見て、応募してみた。

店長は、父親よりも歳上のつとむに驚いたようだが、四十年以上の経理経験を確認すると、アルバイト採用を決めた。つとむには畑違いの職場だが、通勤徒歩五分というのが魅力だ。品出しも手伝ってほしいと言われ、翌日の朝八時、農家からのトラックを待った。生まれて初めて身につけるエプロンの紐を結べず、パートの女性に手伝ってもらった。

「川田さん、こっちに夏野菜並べてもらえますか」

店長の声だ。

(夏野菜とは何だ。聞いたこともない)

つとむは、そう思いながらも、ダンボールからトマトを適当に出していった。見るのも嫌なトマトにうんざりする。今まで、野菜などを買いに行ったことがない。妻と買い物に出かけても、自分は本屋などで時間をつぶしていた。

「川田さん、種類と生産者に分けて並べるんです」

後ろからの店長の声に驚く。食わず嫌いしていたトマトが、こんなにもあるとは信じられなかった。大きさも形も違う。赤しかイメージがなかったのに、黄や紫まであるのだ。しかも、それぞれにカタカナの名前までついている。キャベツとレタスは違うのだ。かぼちゃも、芋も、菜っ葉も、ものすごい種類だ。

(俺は八百屋をなめていたな)

第一日目でそう思った。

なんとか二週間が過ぎた。つとむは、暇を見ては野菜の写真を撮り、家で覚えていった。そんなつとむに妻の智恵は声をかけた。

「経理のお仕事ではなかったの？」

「いや、経理をみてるんだけどな、それはまあ簡単なんだけど、小さい店だからそれだけってわけにもいかないよ。なんとか業績も向上させたいし」

(やれやれどこまでも仕事人間だわ)

そう思いながらも、智恵は、生き生きしている夫に、笑いかけた。

「腰痛めないでね。余計なことだけど、あなたに接客だけは無理だからね」

「わかってるよ。あの主婦たち相手に、俺がしゃべれるとは思ってないよ」

つとむも、笑いながらそう言うと、野菜の写真をながめた。

II・イケメン君とつとむさん

つとむのアルバイトも一ヶ月を過ぎた。

「お、重い」

すいかの入った箱を持つとして、つとむは、よろけそうになった。

「ちょっとどいてよ、俺やるから」

横から茶髪ピアスの若者がつとむを押しやり、スリムな体でどンドンダンボールを運び込む。『はっばや』での先輩社員、なかなかのイケメンだ。

「店長、いくら人手不足だからってあんな歳の人の品出し、かえってじゃまですよ。毎日いらつくんすよ」

倉庫からさっきのイケメン君の声がする。

「まあまあ、川田さんもがんばってるから、いろいろフォロー頼むよ」

そう言うと、店長がつとむの方にやってきた。

「川田さん、レジお願いできますか？」

そう言われたつとむは、やけくそでレジの前に立った。できないというのがしゃくなのだ。まあ仏頂面で準備しているイケメン君がなんとかかすと思いながら。主婦がかごをカウンターに乗せたとき、イケメン君は笑顔をかがやかせて対応する。

(なるほど主婦のファンが多いわけだなあ)

つとむは、感心しながら、イケメン君がバーコードを通した品物をかごに入れていった。

ガシャ！

「申し訳ありません！卵、すぐお取替えさせていただきます」

イケメン君は走って卵を取って来ると、深々と頭を下げた。つとむが、卵の上にじゃがいもをドンと置いたのだ。冷や汗をかきながら初レジの時間を終えた。

「申し訳なかった」

そう謝った勉は、さぞ嫌味を言われるだろうと覚悟した。でも

「卵とかパンとかはどけておいて、後からかごに入れるんすよ。大丈夫っす、おつかれっす」

そう言うと、さっさと倉庫に行ってしまった。やれやれと遅い昼の弁当を食べていると、通りかかったイケメン君が

「うわっ、うまそうっすね」

「一つよかったら」

そう言ってコロッケを差し出すと

「うまい！おれ、いつも菓子パンばっかだから。昨日は健康保険の手続き、ありがとうございました」

ペコンと頭を下げると、コロッケをほおぼって走り去った。

それから、たまに妻が余分に作ってくれる弁当をイケメン君に渡すと、ものすごくうれしそうに食べるようになった。そしてつとむに向ける表情もやわらかくなっていった。

III・地域デビューのつとむさん

はっばやの『秋の収穫祭』を終えて、つとむは智恵の大好物、栗のポン焼きの袋を手に、ゆっくり歩いていた。

「あらっ、はっばやさんの。今日はおつかれさま。新米が安かったわねえ」

庭の手入れをしていた主婦に声をかけられ、しばらく立ち話に付き合う。少し歩いていると、三輪車に乗った子が

「はっばやのおじいちゃん」

と手をふってくれた。

「あら、栗のポン焼き、うちの子も喜んで」

などと話すのに付き合う。歩きながら、つとむは苦笑した。

(通勤五分どころか、二十分はかかっているな)

智恵と近所を歩いていると、あいさつをされることが多い。

「まあ、なあに。私よりよほど顔が広くなってるわね」

そう言って、智恵は目を丸くする。会社勤めの頃は、近所のことなど、つとむの眼中にはなかった。

(川田勉、この歳で地域デビューか！)

そう一人でにんまりした。野菜にも少し、くわしくなった。

その日の夕食、智恵がつとむの前に小鉢を並べる。

「はい、はっばやさんのうりずん豆のサラダ、こっちはルッコラの胡麻和え。私も知らなかったのよ。なかなかおいしいものね。お客さんに勧められるね」

智恵は、せっせと栗のポン焼きを口に運びながら、目を細めて言った。

IV・胸ときめいたつとむさん

つとむのアルバイトも、一年が過ぎようとしていた。

「いらっしゃいませ！」

つとむは、自動ドアから入ってきた人に大きな声をかける。駆け込んできた幼い子どもが転んで泣いた。ときどき見かける子だ。つとむは接客に慣れたとはいえ、子供は苦手だ。若い頃から、自分の二人の子供とも、遊んだことがほとんどない。

「おじょうちゃん、けがはないかな。雨で靴がぬれてたんだね。アメの日はほら、アメのプレゼントだよ」
などと言って、つとむの考えたオヤジギャグの飴を差し出す。

「まあすみません、大丈夫です。おてんばで困ります」

そう言った母親が、やさしく子供を抱っこした。その子は、もう泣き止んで

「おじいちゃん、あいね、こどもピーマン食べられるんだよ」

抱っこされたまま、足をピョンピョンさせて言った。そばにいた上品な女性が、つとむに笑顔に向けた。

「いつも孫がお世話になっております。こちらのこどもピーマンは苦くなくっておいしいんですって」

つとむは、あわてておじぎをした。

「いつもお買い上げありがとうございます。今日も入荷しております」

じつとつとむの顔と名札を見つめていた、その女性が、そっと言った。

「あのーもしかして、人違いだったら申し訳ありませんが、川田勉さん？でいらっしゃいますか？」

「えっ、はい、そうですが……」

「わたし城南中学で、同じクラスだった田辺由紀子です」

「えっ、えっ！いや、ほんとだ！田辺さん！」

「まあ、奇遇ですわね。おなつかしゅうございます。娘がこちらに嫁いでいて、今日はちょっと一緒に。川田さん、お変わりになりませんか」

「とんでもないです、すっかりジジイです。いやあなつかしいですねえ。田辺さんは、いっそうおきれいになりましたね」

つとむは、ちょっとそりだしているお腹を引っ込めるようにして言った。

「あら、無口な川田君が、お上手をおっしゃるようになりましたのね。わたし、今東京なんですけどね、一人になってしまったので、来月、娘の近くに越してくるようになりましたの。そうしましたら、ちょくちょくおじゃまいたしますわね」

つとむの胸に薔薇が咲いた。淡いローズ色の、小さな一輪の薔薇だ。あこがれの由紀子さんだった。中学のときは、話すことさえできずにそっと閉じ込めたまま、忘れていた。

「たくさんお買い上げありがとうございました！」

自動ドアの所まで見送ったつとむに、二人は笑顔でおじぎをした。

「バイバイ」

あいちゃんも、こどもピーマンの入ったバッグをふった。

(やましいことは何もないが、これは智恵にはナイショにしておこう)

三人を見送りながら、つとむは小さく息をはいた。

V・レストランのつとむさん

つとむがはっぱやでアルバイトを始めて五年以上が過ぎた。ある日の閉店後、暑苦しいスペースにスタッフが集まっていた。

経営の打開策をと開かれたミーティングの席上、社長が地産野菜の店舗を改装してレストランを併設することを提案した。シーンとした中で、ぷっちさんが緊張した声を上げた。

「私ずっとレストランの厨房で働いていたのでシェフやりたいです。ピザは自信あります」

半年前から勤めだしたパートの千葉さんは、小柄でパワフルな女性で、プチ千葉を縮めて『ぷっちさん』と呼ばれている。

オープンすることになったイタリアンレストランは、調理師免許を持っているぷっちさんにチーフを任せ、他のスタッフは募集することになった。

けれど、みんなが盛り上がりつつある中で、つとむだけが浮かない顔をしていた。雑多な書類作成などの事務はまあ、仕事だからいいのだが、先行きの経営を考えると果たして成功するのかどうか不安が首をもたげた。

「なんとかしなければならぬのは確かだけれど、大きな借金が膨らんだら共倒れになってしまう。若いスタッフを失業させたくないよなあ。年金暮らしのバイトの爺さんの余計なお世話だけれど」

そんなことを考えながらも、オープンに向けてできるだけ力を注いだ。

その前夜、プレオープンのお祝いに、つとむと智恵はレストランに出かけた。

「あらあ、このピザすっごくおいしい！サラダも、うん、いけるわね」

そう言いながらうれしそうにフォークを動かしている智恵の横で、つとむはビールばかり飲んでいた。

「ピザやパスタなどというものはどうも好きになれん。苦手のトマトをやたら使ってるし。大体飯は箸で食うものだ。うまい地酒と肴だ。やっぱり赤ちょうちんだよなあ」

そう心の中でつぶやきながら。

オープンしてからも、ぷっちさんが

「川田さん、今度このメニュー出そうと思うんですけど、どうでしょうか？」

などと声をかけてくれるが、つとむは大きく手を振って逃げ出す。

「やめてくれ。俺は自慢じゃないけどフライパンとか持ったこともないし味も全く分からないから」

レストランは、波はあるけれど、ぷっちさんのアイデアあふれるメニューが功を奏して、主婦のランチタイムに少しずつ人気が出てきた。

その間も、つとむは朝早く近所にチラシを配ったりして奮闘していた。しばらくして夕食の時につぶやいた。

「夜にもなんとか客足を向けたいのだよなあ」

智恵は、ちょっと考えた後 言った。

「ディナーコンサートとかどうかしら？」

それを聞いて、つとむは面食らった。ディナーもコンサートも大の苦手だ。落語の寄席は好きだけれど。

それでも準備にあちこち足を運んでいる間に、机の引き出しに若い華やかなドレスの女性の写真が入った名刺がたまり始めた。

「なんかプロダクションのおっちゃんみたいだなあ。現役の頃の無粋な名刺と大違いだ」

そんなことを言って一人苦笑した。出演してもらおう方にとって、ギャラも安いし、会場の条件も悪い。なかなか調整が難しかった。

それでもなんとかコンサートが実現した。智恵の友人の娘さんとそのご主人が、モンゴルの民族音楽を演奏することになったのだ。きちんと衣装を身につけ演奏してくれた二人につとむは感激した。初めて聴く馬頭琴や陽琴という楽器の美しい音色、ホーミーという珍しい歌唱に涙が出そうになった。アンコールの曲を聴きながらみ

んながうっとりやわらかい笑顔でいるのを見て、そっとつぶやいた。

「こういうのもいいもんだなあ」

ディナーも好評で、デザートを出し終えたぷっちさんが、汗を拭きながら曲に聴き入っていた。そして、つとむと目が合うと小さくガッツをした。

その夜、反省会という名の飲み会を終え、帰り道をふらふら歩いていた。ひんやりした秋風が心地よい。

「人生って何が起こるか分らん。俺が八百屋やレストランなんてなあ。自分でもびっくりするよ。しかし、そう長くは無理だろう。パソコンが見つらくなってきたからなあ。この間、5と6を間違えた。事務屋が数字間違えたらおしまいだ。今が辞め時だな」

そう決めて、つとむは細くなった寂しげな月を見上げた。